
恋愛偏差値

唯人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛偏差値

【Nコード】

N6121V

【作者名】

唯人

【あらすじ】

結婚を意識しだした親友の彼女たちは、話題の占い師の元を訪れる。

「例の彼と同棲し始めてからもう二年近く経つんでしょ。それなのに未だに結婚話も出てないなんて、もしかして倦怠期じゃないの」
駅前に新しく出来たオープンカフェで、私と由梨は遅い昼食をとっていた。休日ということもあり、店内は主婦や学生で賑わっている。

「倦怠期、ってどういう意味よ。失礼ね」

私は笑いながら由梨の顔を睨みつけた。由梨は会社の同僚であり、大学時代からの親友でもある。

「だって、最近奈緒子ってば、自分から進んで残業ばかりしてるじゃない。もしかして彼と顔を合わせるのが気まずいせいかな、って考えていたのよ」

「残念でした。毎晩一緒に過ごしてるわ。残業をしているのは、ちよっとお金が入用になったからよ」

「まさか」

由梨は目を見開いた。

「結婚が決まった、っていうこと？」

「どうかしらね」

私は意味ありげに微笑んだ。

「でもこれからのことを考えると、稼げるうちに稼いでおいた方がいいと思うって」

「酷いわ。私にまで秘密にしていたなんて。親友の私には何でも話してくれていると思っていたのに、何だかショック」

あーあ、と由梨は背を逸らした。

「これで華の独身貴族は私だけになっちゃうのか。つまらなくなるわね」

「何言ってるのよ。由梨だって可愛い彼がいるじゃない」

「それこそ彼との結婚だなんて何年先になるか分からないわ」

由梨には七歳年下の彼氏がいる。以前私の彼と四人で飲みに行った事もあった。明るく社交的で、魅力的な青年ではあるが、まだ大学生ということもあり、順調に交際が続いたとしても、結婚はまだまだ先だろう。

「そうだ、奈緒子って占いとか興味ある？」

姿勢を戻した由梨が唐突に訊いた。

「占い？」

腕を組んで考えた。

「そんなに興味ある方じゃないかも。テレビや雑誌の占いも、いい結果ならなんとなく気分もいいし、悪ければ信じない。その程度かしら。でも、どうして？」

「この先によく当たる、って評判の占いの店があるらしいのよ。女子中高生じゃあるまいし、この歳になって一人で行くのもなんじゃない」

そう言って由梨は手を合わせた。

「ちょっと付き合ってくれない？」

「そういうことね」

たまには年下の彼との恋愛に悩む親友に付き合ってやるか、と頷いた。

貴女の恋愛偏差値を占います――

看板の文字の下にはそう書かれていた。なるほど、人気の店らしく、女子学生を中心にテナントビルの廊下にはずらりと列が出来ている。小一時間ほど待って、私たちはやっと店内に入る事が出来た。店内は想像していた様な仰々しい内装や陰気な照明でもなく、何処か学校の保健室を想像させる、真っ白で清潔な空間だった。

「いらっしやいませ」

大理石のテーブルを挟んだ向かいに座る、白いワンピース姿の女が丁寧に頭を下げた。

「この店では、貴女がたの恋愛偏差値、平たく言えば、どれほど男

性を愛する力と愛される力に満ちているか、という事を、数値化して教えさせて頂いております」

占い師は、数十年前までは相当な美人であつたろう、と感じさせる、妖艶さの残る初老の女だった。

「お二人とも、同じ占いでよろしいですね」

私は結構です、と言いかけたが、由梨が「そうです」と頷いた。占いを信じる気持ちはなかったが、やはり興味はある。私も黙って頷いた。

占い師の女はテーブルの上に、何処にでもあるような大学ノートと薄い方眼紙を広げると、由梨に向かって幾つか質問をし始めた。本人と恋人の名前、生年月日、血液型、趣味嗜好。

ありきたりだな、と思いながら黙ってその様子を見ていた。

ただ一つ変わっていたのは、手相ではなく、由梨の指先を丹念に調べた事だった。そして占い師は暫く考え込むように目を閉じると、カッと目を見開き、方眼紙に計算式の様な、奇妙な文字列を書き込んでいった。

「貴女は人を愛する能力五十八、愛される能力六十で恋愛偏差値は六十二、という高い数字の持ち主です。若い彼も将来性は十分にあるので、時期を待って結婚すれば、良い家庭が築けることは間違いないでしょう」

「本当ですか」

由梨の目が輝く。

「ええ。ただ、努力を怠ってはいけませんよ。貴女のサポートを彼は望んでいます。多少もどかしく感じても、それが彼にとって一番必要な事ですからね」

七歳も年が違えば結婚は難しいだろう。二人のことを知る人間はみなそう思っていた。由梨も周りの人間にどう思われているのか気付いていない筈がない。占い師の言葉は由梨が一番求めていた言葉だろう。

「良かったわね、由梨」

頬を紅潮させる由梨は照れ臭そうに微笑んだ。

「それでは奈緒子さんの方を視させて頂きますね」

同じような質問。そして指先を丁寧な撫でられる。マッサージをされているようで心地の良い感覚だったが、占い師の顔はみるみる曇っていった。

「あの、私の手に何か……」

「そうじゃないの」

女は首を振った。私と由梨は目を合わせ、怪訝な表情で占い師の姿を様子を眺めた。

そして同じように文字列を描く。暫くして、占い師の女は重い口調で言った。

「申し上げにくいのですが、貴女の愛する力は三十四、愛され度は三十一です。恋愛偏差値は三十二と非常に低い数値になりました。残念ながら、貴女は異性を愛する力も、愛される力も他の世の女性に比べかなり劣っているようです。それに貴女の恋人という方も、既にあなたへの感情を完全に失っていると思われるます」

「そんな……」

声を出したのは由梨だった。私は占い師の言葉に俯き、唇を噛みしめていた。

「先生。由梨は彼との結婚も決まって貯金を始めたところなんですよ。それなのにあんまりじゃありませんか」

占い師は申し訳なさそうに何度も首を振った。

「ええ、貴女の仰る通りです。酷いことを言ってしまった。恋愛偏差値はあくまでも占い、統計学でしかありません。信じるか信じないかは、あくまでもお客様の心一つでしかありませんから」

「そうですね。私もせいぜい糠喜びしないよう、気を付けさせてもらいます」

由梨はそう言い捨て、乱暴に扉を閉めた。

何度も詫びる由梨に、私は気にしないで、と言い続けた。

「あまりいい気はしないけど、逆に言えばもっとお互いを思いやった方が良く、ってことでしょう。それならそれで正しい占いだし、それに何と言っても私と彼はこれからずっと一緒なんだから」

「そうね。奈緒子と彼が幸せになる事が一番だものね」

「由梨も彼のサポート、頑張らなきゃね」

互いの家に向かうプラットホームで、私たちは笑顔で手を振りあった。

彼と二人で暮らすマンションの扉を開けた。

「やっぱりどうしても寒くなっちゃうわよね」

一般的な二DK。私は彼の眠る寝室に入り、明かりを付けた。足元には冷気が漂っている。

「ただいま。ごめんね、遅くなっちゃって」

彼は霜のついたガラス扉の向こうで静かに眠っている。ガラスの扉を開けると、強烈な冷気が全身に降りかかった。

「そんなに怒らないでよ。ちょっと今日は嫌な事があったから、由梨と遅くまで飲んできただけなんだから」

彼の冷たい唇に、酒の熱気が残る唇を押しあてる。

「お酒臭い？ でも我慢して。また明日から残業も頑張るからね」

この指先で、彼の全裸の身体をゆっくりとなでまわす。

「気持ちいいでしょ。でも随分冷気が抜けちゃったみたい。せっかく私だけのものになったのに、傷んでしまったら意味がないものね」
彼の胸に軽くキスをする。

「ほんと、あなたのベッドの電気代も馬鹿にならないし、特注の冷凍庫のローンも残っているし、大変なのよ。でも、それもこれも、あなたと二人で永遠に一緒に暮らす為だから仕方ないのだけれど」

私は自分の指先を見つめた。

これほど人を愛せる指先なんてあるものですか。

そう呟き、彼の眠る冷凍庫の扉をきっちり閉めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6121v/>

恋愛偏差値

2011年8月9日03時39分発行